

〈研究ノート〉

子どもミュージカル制作上演過程の考察

—平成 21 ～ 24 年度ゼミ—

伏見 強

平成 21 年度から 24 年度までの 4 年間、子ども向けミュージカルの制作と上演を本ゼミ活動の柱に据えてきた。年度によりテーマや題材、それに伴う課題は異なるものの、徐々にではあるがゼミ生の自発性も発揮されオリジナリティのある活動に変化していった。本論考では、当該 4 年間の活動をゼミの指導計画や授業記録、学生が制作した台本、録画などに基づいて振り返り、各年度の発表の成果や特徴を記す。音楽表現系ゼミの在り方を展望すると共に今後の活動の方向性を探る。

キーワード：保育ゼミ、子ども向けミュージカル、制作上演

1. はじめに

平成 19 年度のカリキュラム改訂により「総合演習」に替えて卒業必修科目「保育ゼミ」が始まる。以来、本ゼミのテーマをアンサンブル演習とし、「合唱や合奏、音楽劇などのアンサンブル演習を通していろいろな音楽に親しみ、幼児音楽との関連を考えます。アンサンブルはソロ（独唱・独奏）とは異なり、音楽の好きな人が集まれば楽しむことができます。同好の仲間と心を合わせ、楽しみながら音楽を深めたい人の参加を歓迎します。」と学生にアナウンスしてきた。本ゼミ履修者は協議を重ね試行を繰り返しながら幼児向け子どもミュージカル（以下、ミュージカル）を制作上演してきた。

例年、前年度に発表した録画を鑑賞し、その年度の演目を決めてきたが、どの学生にとってもミュージカルの上演は初めてのことであり、制作のプロセスを把握するまでには多くの時間を要し、演目の決定でさえ議論が百出するなど全員が作品の全容を把握するまでの道のりは容

易ではなかった。

本年度も授業開始時に前年度の録画を鑑賞しながら演目を検討したが、ミュージカル自体の捉え方が例年のゼミ生とは若干異なり新たな方向性を志向している。ここでは平成 21 年度からの 4 年間のゼミ活動を振り返ることとし、各年度の取り組みを整理し対比する。

なお、当該 4 年間のゼミ履修者は平成 21 年度から 23 年度が各 20 名で、24 年度は 28 名である。学生は全 6 クラスに亘っており追加練習やリハーサルなどの補習が組み難いなど課題も多かった。そこで 25 年度は学科の方針に倣い本ゼミも定員を 15 名とした。

以下、ミュージカル上演の概要、本ゼミ生の興味・関心、年度別授業実施の概要、制作上演の特徴の順に述べる。

2. ミュージカル上演の概要

各年度共前期のまとめとしてオープンキャンパスのミニ講義に参加し発表した。これらは年度末に予定された幼稚園児との交流音楽会での

表 1 前期の上演題目、日程、会場

前 期	演 目	発表日	会場
平成 21 年度	ミュージカル：ピノキオ物語	平成 21 年 8 月 1・2 日	同唱館
平成 22 年度	ダンス：アンダーザシー 他	平成 22 年 8 月 7・8 日	同唱館
平成 23 年度	合奏合唱：アンパンマンマーチ 他	平成 23 年 8 月 6・7 日	同唱館
平成 24 年度	サウンド・オブ・ミュージック ハイライト 他	平成 24 年 8 月 4・5 日	同唱館

表 2 後期の上演題目、日程、会場

後 期	演 目	発表日	会場
平成 21 年度	ミュージカル「森の音楽会」	平成 22 年 1 月 22 日	同唱館
平成 22 年度	ミュージカル「不思議の国のアリス」	平成 22 年 12 月 14 日	同唱館
平成 23 年度	ミュージカル「ピーターパン」	平成 24 年 1 月 24 日	同唱館
平成 24 年度	ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」	平成 25 年 1 月 22 日	同唱館

ミュージカル公演を意識して企画したプログラムであり、そのプレ的な意味合いも含んでいる。

各年度のミニ講義の演目は表1のとおりで、いずれも会場は照明や音響設備を備えた本学同唱館である。

後期は幼稚園児等との交流音楽会での上演を目差した。実施時期については本学開学 50 周年記念事業に参加した平成 22 年度を除き、附属幼稚園等と調整の上、後期末定期試験前の補習・補講期間中に設定した。各年度の演目は表 2 のとおりである。

3. 本ゼミ生の興味・関心

毎年、幼児教育学科Ⅱ回生開講前のオリエンテーションにおいて学科全体でⅡ回生共通アンケートを実施している。この内、志望進路や興味・関心のある科目、Ⅰ回生時に楽しかったこと、アルバイトの状況についての自由記述を基にして本ゼミ生像を探る。

3-1 志望進路

幼児教育学科の一ゼミであれば当然のことだ

表 3 年度当初の志望進路（22～24 年度）

	22 年度	23 年度	24 年度
保育園	19	14	25
幼稚園	19	15	25
施設	2	3	6
一般企業	1	3	2
その他進学等	1	1	1

が、本ゼミ生の志望進路としては幼稚園と保育園が圧倒的に多い。また各年度とも同数または僅差であった。（表 3）

平均値でみると幼稚園または保育園を志望するものが平成 22 年度は 90%、23 年度は 81%、24 年度は 85%に上る。このアンケートは複数回答を可としており、ほぼ全員が幼稚園もしくは

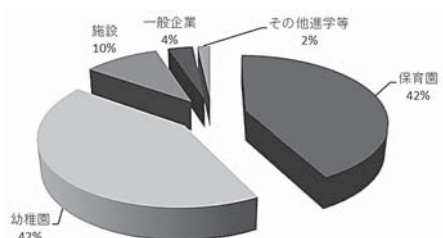


図 1 24 年度ゼミ生の志望進路

保育園（所）を志望していた。（図1）

3-2 I 回生時に興味のあった科目

ゼミ生の興味・関心のあった主な学科目としては音楽関係科目が圧倒的に多く次に体育・身体表現系科目が続き、造形系と心理系科目が拮抗している。（図2）縦軸は人数を示し、その他の項目には教育・福祉系科目および小児栄養、精神保健、英語、仏教系科目などが含まれる。

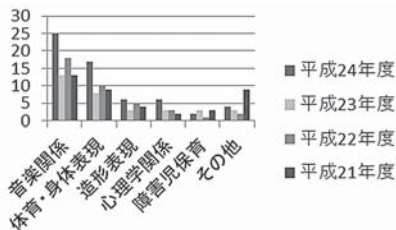


図2 I 回生時に興味のあった科目等

3-3 学生生活において楽しかったこと

例年、友達と過ごす時間が楽しかったと回答し、人間関係、とりわけ友人との関係を重視している。身体表現やダンス、幼児体育での交流授業などに積極的に参加した学生が数名いるものの学園祭への参加やクラブ、サークルを楽しむ学生は少なくなっている。（図3）

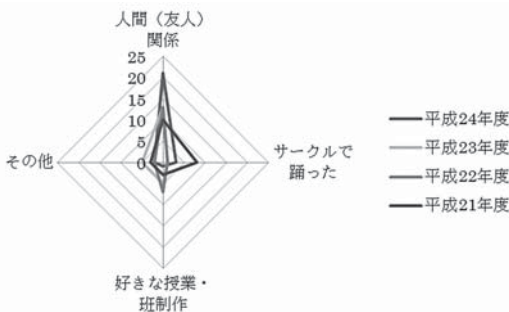


図3 学生生活で楽しいこと等

3-4 アルバイト

他方、アルバイトをする学生は増加傾向を示し、平成23年度は60%と少なくなっているものの24年度は80%近くに上った。（図4）

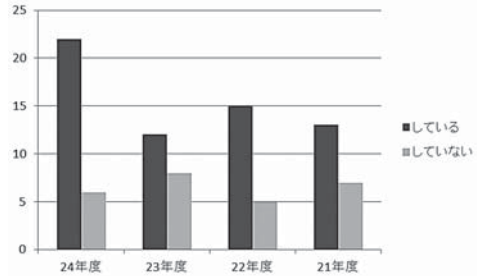


図4 アルバイトの状況

4. 年度別授業実施の概要

便宜上、前後期をそれぞれ前半、中盤、後半の概ね5回ずつで区切り、さらに補習補講期間などで実施した集中練習も加えて通年を8期間に分けて授業の経過を年度別に記し、企画から上演までの制作の過程並びに各年度の授業の進捗状況を辿る。（表4）

上演曲目の決定では、平成21年度は教員がある程度主導した。平成22年度以降は学生の主体的な関わりを導くために学生の自主性を尊重し可能な限り実施に向けた話し合いを続けた。年度を追って徐々に舞台や照明、音響の役割・効果が認識されるようになる。その都度、新たなアイデアを求めて企画段階から京都文教大学ステージプロデュース部（以下、ステプロ）関係者に相談する場面も増えていった。

平成21年度は前期にミュージカル「ピノキオ物語」¹⁾を取り上げ、オープンキャンパスのミニ講義として舞台照明なども採り入れて本格的な上演を試みた。また、後期も演目を変えてミュージカルを上演することにし「森の音楽会」²⁾を制作発表した。

表 4 年度別授業実施概要

	21 年度	22 年度	23 年度	24 年度
① 前期前半	20 年度ミュージカル・ミュージックパネル録画鑑賞 演目決定ミュージカル「ピノキオ物語」、音楽練習、台詞練習、配役決定	21 年度「ピノキオ物語」録画鑑賞 50 周年記念事業、七夕、オープンキャンパスへの参加等具体的取組の検討	22 年度「ふしぎの国のアリス」録画鑑賞、演目決定ミュージカル「ピーターパン」、あらすじ・使用音楽・ダンス・照明・音響・舞台等のプラン作成	23 年度「ピーターパン」録画鑑賞 演目決定ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」、台本検討
② 前期中頃	大道具・小道具・衣装・照明・音響プラン作成 大道具・小道具・衣装制作	演目決定ミュージカル「ふしぎの国のアリス」、あらすじ・使用音楽・ダンス・照明・音響・舞台等のプラン作成、配役決定、オープンキャンパス用演目検討	配役決定 台本修正版読み合わせ オープンキャンパス用演目検討	「さようならごきげんよう」「ドレミの歌」等合唱練習 オープンキャンパス用演目検討
③ 前期後半	立ち稽古 総練習 舞台練習	七夕で創作ダンス披露、オープンキャンパス用「ゴールデンアフターヌーン」「アンダーザシー」等練習	オープンキャンパス用「マルモのおきて」「アンパンマンマーチ」「アンパンマン体操」、手遊び等練習	オープンキャンパス用「サウンド・オブ・ミュージック」抜粋、「ジャガボテ仮面」、手遊び等練習
④ 補習期間	舞台練習、リハーサル 本番「ピノキオ物語」	舞台練習、リハーサル 本番（表 3）	舞台練習、リハーサル 本番	舞台練習、リハーサル 本番
⑤ 後期前半	ピノキオ録画鑑賞、演目決定「森の音楽会」、配役決定、音楽練習、台詞練習	「ふしぎの国のアリス」部分練習、パート練習、ダンス振付	「ピーターパン」本格的練習、大道具・小道具・衣装・照明・音響プラン作成	「サウンド・オブ・ミュージック」本格的練習
⑥ 後期中頃	大道具・小道具・衣装・照明・音響プラン作成 大道具・小道具・衣装制作	通し稽古、大道具・小道具・衣装・照明・音響プラン作成、総合練習	大道具・小道具・衣装制作 ピアノ伴奏をゼミ生が録音 ゼミ生オリジナル曲も採用	大道具・小道具・衣装・照明・音響プラン作成 総合練習
⑦ 後期後半	立ち稽古 総練習 舞台練習	舞台練習、リハーサル 本番「ふしぎの国のアリス」 交流音楽会・50 周年記念	立ち稽古 総練習 舞台練習	立ち稽古 総練習 舞台練習
⑧ 補習期間	舞台練習 リハーサル 本番「森の音楽会」		舞台練習 リハーサル 本番「ピーターパン」	舞台練習、リハーサル 本番「サウンド・オブ・ミュージック」

平成 22 年度は、ミュージカル「不思議の国のアリス」³⁾を幼稚園児等との交流音楽会で上演することにした。前期はこれを視野に入れながら「不思議の国のアリス」の合唱「ゴールデンアフタヌーン」やダンス「アンダーザシー」などをオープンキャンパスで発表(表 5)し、並行して台本制作や配役を考えるなど後期に備えた。

表 5 平成 22 年度オープンキャンパス発表プログラム

ピアノ連弾	「ピーターパン」より	きみもとべるよ!
手遊	び	ピカチュウ
合奏	奏	ミッキーマウスマーチ
歌唱	唱	ゴールデンアフタヌーン
ダンス	ス	アンダーザシー
歌唱	唱	小さな世界

後期に入ると「不思議の国のアリス」の練習が本格化する。形が明確になるに従って学生たちの連帯感も増し、徐々に自主的な活動へと変化していった。

平成 23 年度はミュージカル「ピーターパン」⁴⁾を、平成 24 年度はミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」をそれぞれ制作上演した。

本ゼミが採り上げた「ピーターパン」は東邦幼稚園の生活発表会で先生が創作あるいは脚色し、作曲を石橋るき氏に依頼し演じられたものを土台に新リズム表現研究会メンバーが手を加えアレンジしたものである⁵⁾。このテキストは子どもが演じることを前提にし作られているが、本ゼミが上演したミュージカルは子どもに鑑賞してもらうことを目差しており、テキストのねらいと大きく異なる。

ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」はミュージカル映画「サウンド・オブ・ミュージック」⁶⁾を手本にしており、「ドレミの歌」や「さようならごきげんよう」などの名曲を取り入れて、家庭教師マリアとトラップ家の子どもたちが音楽をとおして仲良くなっていく様子を描いた。物語のポイントを音楽会の場面に設定し、子どもたちにも理解しやすく楽しめる内容を心がけた。そして原作の背景に流れる当時のナチスドイツとオーストリアの微妙な政治・社会情勢に関わる部分は省略した。

5. 制作上演の特徴

制作上演したミュージカルを年度別に整理しその特徴を整理する。(表 6)

平成 21 年度は前期に「ピノキオ物語」、後期に「森の音楽会」の 2 作品を制作上演した。平成 22 年度は 50 周年記念事業が開催され学科発表も盛大に催されるということもあって、本ゼミも活発な活動が見られた。この年度の特徴としてミュージカルの要素であるバレエを重視したことを挙げることができる。平成 23 年度は 22 年度を越えたいとするゼミ生の声が集約され、テキストの音楽を取り入れながら物語はアニメ映画を参考にして様々な舞台上の工夫が盛り込まれた。平成 24 年度は映画サウンド・オブ・ミュージックを参照し「ドレミの歌」「エーデルワイス」などの名曲を中心にしてストーリーを脚色した。

いずれの作品においても演出は学生たちのアイデアを持ち寄ったものであり、衣装小道具もみんなで手作りした。大道具はプロジェクターを用いてパソコン上の画面を投影した。ただし、「ピノキオ物語」と「サウンド・オブ・ミュージック」は白地のバックスクリーンを使用し、「ふしぎの国のアリス」と「ピーターパン」はステージ上に設置された上手側のスクリーンを用

表 6 制作上演の特徴

	21 年度	22 年度	23 年度	24 年度
演 目	ピノキオ物語 森の音楽会	不思議の国のアリス	ピーターパン	サウンド・オブ・ ミュージック
台 本	「ピノキオ物語」 ¹⁾ 「森の音楽会」 ²⁾	DVD「不思議の国ア リス」 ³⁾ を手本に学 生たちが話を抜粋し てミュージカルの台 本を制作	「ピーターパン」 ⁴⁾ を ヒントに学生たちが 台本を制作	DVD「サウンド・オ ブ・ミュージック」 ⁶⁾ を手本に学生たちが 抜粋してミュージカ ルの台本を制作
音 楽	城野賢一作詞、松山 祐司作曲「ピノキオ 物語」	ゴールデンアフタ ヌーン不思議の国の アリス 他	石橋るき作曲「ピー ターパン」より部分 的に抜粋	ドレミの歌 エーデルワイス 他
演 出	学生の合議	ゼミ学生の合議	ゼミ学生の合議	ゼミ学生の合議
衣 装	学生手作り	学生手作り	学生手作り	学生手作り
小道具	学生手作り	学生手作り	学生手作り	学生手作り
大道具	学生が制作した絵を 後ろ幕に大画面で投 射	学生が背景として選 んだ写真を上手上の スクリーンに投射	学生がパソコンで作 成した背景を上手上 のスクリーンに投 射、エンドロールも 作成	学生がパソコンで作 成した背景を後ろ幕 に大画面で投射
音 響	ステプロに依頼	ステプロに依頼	ステプロに依頼	ステプロに依頼
演 奏	学生ピアノ伴奏 効果音にドラム等を 使用	音楽 CD 再生	学生ピアノ伴奏（録 音）	学生ピアノ演奏
照 明	ステプロに依頼	ステプロに依頼	ステプロに依頼	ステプロに依頼
配 役	ゼミ学生の合議	ゼミ学生の合議	ゼミ学生の合議	ゼミ学生の合議
特 色	テキストを重視	バレエ、演劇的要素 を強調	テキスト曲を採用 学生のオリジナル曲 も追加	ドレミの歌やエーデ ルワイスなどの名曲 を合唱し楽しい物語 を制作

いた。本番の音響や照明については全作品をステプロにお願いしたが、台本作成から配役、練習日程の作成など制作上必要な事項はすべてゼミ生の合議により決定した。

テキストに沿って制作した作品は平成 21 年度のみで、平成 22 年度～24 年度はアニメや映画のミュージカルを手本にしながら自分たちで子ども向けに物語を脚色し、それぞれに個性を持たせた。

6. 考察

ゼミのまとめとして各年度の前・後期に発表の機会を設定してきたが、8 月のオープンキャンパスのこの時期は前期定期試験が前後し、1 月後半の交流音楽会は後期定期試験前の補講期間中であつた。加えて前期は定期試験直後から保育園（所）実習が始まり、幼児教育学科Ⅱ回生の学生は極めて多忙である。全員が揃って取り組むことを前提とする本ゼミのような活動ではこれらの時期の練習日程の調整も課題の一つで

あった。

こうした中、平成 21 年度はオープンキャンパスで「ピノキオ物語」⁷⁾を、幼稚園児との交流音楽会で「森の音楽会」の 2 作品を制作上演した。このように 1 年で 2 作品を制作できたのはテキストを忠実に再現したことによるものであろう。2 作品とも既に出版されたテキストを使用し、台本や音楽を習熟することで上演することが可能であった。更に前期のステージ経験によって発表までの一連の段取りや練習量がある程度学生にも予測ができ、後期の集中した取り組みに繋がるなど 2 作目制作に生かされたと思われる。しかし、この種の既成作品への感覚的な乖離から学生の自発的な取組を引き出すことが難しいと感じられる場面も少なからずあった。学生の時間がタイトであり、活動に様々な制約が予想される中では学生のモチベーションを左右する選曲等にも工夫が求められる。

平成 22 年度以降は年間を通してゆとりを持って腰を据えた取組ができるよう通年でミュージカルを構想・制作することにし、オープンキャンパス用のプログラムは別途考えることにした。

平成 22 年度は新しいスタイルのミュージカル「不思議の国のアリス」を 50 周年記念事業の一環として上演する。学生たちにとって馴染みのあるディズニーのアニメ映画を参考にし、脚本合作から配役、衣装考案、音響・照明プラン作成等に至るまで手作りで、幼児教育を学ぶ学生ならではの独創性も随所に観られた。この制作の過程は「ゼミにおけるミュージカル『不思議の国のアリス』上演の成果と課題」⁸⁾にまとめた。

平成 23 年度の特徴としてテキストの音楽を採用しつつ台本はアニメを参考にした点を挙げることができる。ピアノ伴奏を事前に収録し、ゼ

ミ生が作詞作曲したポップス調のオリジナル曲も散りばめるなどの新しい工夫も盛り込んだ。

平成 24 年度は映画サウンド・オブ・ミュージックを参考に名曲を中心にしたストーリーが考えられた。世界的に世代を越えて大ヒットした曲を取り上げて子どもたちにも理解しやすく楽しんでもらえるミュージカル創りを目差し、合唱を中心にした物語に仕立てた。斬新な演出上の工夫は無かったが、音楽を重視するというミュージカルの王道を目差した方向性は評価したい。

上演曲目の決定において平成 21 年度は教員がある程度主導したが、平成 22 年度以降は可能な限り学生の自主性を尊重した。演目の決定にもかなりの時間を割いたこともあり、ミュージカル制作・上演は年間を通して 1 作のみとなったが、各年度ともゼミ生の思いを反映させて前年度には無い工夫が盛り込まれ全員が納得する形で特色を出すことができた。

例年、年度の初めの頃は学生一人ひとりの理解や取り組む姿勢に若干の温度差が見られたが、練習が進むに連れて友人たちとの関係を重視しながら自らの時間を融通し合うなどして何とか形を付けてきた。音楽を通したこのような活動では、制作のはじめの頃はゴールが見通せず混沌とした状況からスタートするのが通例で、中盤になってようやく自分の立ち位置を見つけ練習を重ねる度に少しずつ喜びも伴ってくる。そして聴衆を前にした本番を経験することで達成感を味わうことができる。

毎年、前作に学びながら前学年に無いものを希求し各学年で新たな作品創りをしてきた。ミュージカル制作過程においては演目や配役の決定のほかにも大（小）道具・衣装制作など多様な課題が浮上するなど、個人的な事情から予定通りには進まないことも多い。元々本ゼミ生

は音楽や体育、造形などの表現系に興味・関心が高く、加えて友人関係を重視する傾向が強いと思われるが、これらの困難な課題の克服を通してコミュニケーション力などの汎用的な学習成果の獲得にも繋げることができたと考えた。

7. おわりに

平成21年度から24年度にゼミで採り上げたミュージカルについて制作・発表までの経過を振り返ったが、いずれの年度においても演題の決定とどのように舞台を創っていくかが最初に出くわす大きな課題であった。その際、前年度とは違うものをしたい、前年度とは異なる発表内容にしたいという声が必ず上がった。しかし、練習が始まると自分たちの思いが簡単には実現できないという現実突き当たる。なかなか成果が出せない練習を繰り返しているうちに少しずつおぼろげな形が姿を現す。そして何とかこの形が実感できた頃から練習がスムーズに動き出す。舞台作品の制作過程とはこうしたものなのかも知れないが、毎回このような経過を辿りながら幼児向け子どもミュージカルの制作に汗を流してきた。

これらの苦労を回避するために毎年同一作品を採り上げてそれを深めていくという方法もあるだろう。また、子どもたちが主体的に演じるような平易な作品作りを目指すことも一つの方法かも知れない。平成25年度頭初の話し合いで

もこれらの意見が散見されこれまでとは少し異なる方向性も見られた。

本ゼミのテーマはアンサンブル演習であり、合唱や合奏、音楽劇などのアンサンブルを通して様々な音楽に親しみ、幼児音楽との関連を考えてきた。言わずもがなであるがアンサンブルは独唱や独奏（ソロ）とは異なり、仲間と一緒に心を合わせて協力し合って成り立つものである。本ゼミではこの考え方に基いて試行を繰り返している。

注

- 1) 城野賢一作詞、松山祐司作曲、編著者／振付・監修 城野賢一・清子：「ピノキオ物語」、学芸会・おゆぎ会用舞踊劇名作集ピノキオ物語・いなかのねずみと町のねずみ・金のがちょう、全音楽譜出版社、東京、pp.5-48
- 2) 新リズム研究会：表現するよろこびを伝えるミュージカル遊び「森の音楽会」、第11版、ひかりのくに株式会社、大阪・東京、pp.51～68（2005.1）
- 3) DVD「不思議の国アリス」日本語吹き替え版、シャフト株式会社、有限会社アブロック、東京
- 4) 新リズム研究会：表現するよろこびを伝えるミュージカル遊び「ピーターパン」、第11版、ひかりのくに株式会社、大阪・東京、pp.169～193（2005.1）
- 5) 新リズム研究会：表現するよろこびを伝えるミュージカル遊び「ピーターパン」、第11版、ひかりのくに株式会社、大阪・東京、「おわりに」
- 6) DVD「サウンド・オブ・ミュージック」ファミリー・バージョン日本語吹き替え版、20世紀フォックスホーム エンターテインメント ジャパン株式会社
- 7) 伏見強：ゼミにおけるミュージカル「ピノキオ物語」上演の成果と課題、単著、京都文教短期大学研究紀要、第48集、pp.77-85（2010.3）
- 8) 伏見強：ゼミにおけるミュージカル「不思議の国のアリス」制作・上演の成果、単著、京都文教短期大学研究紀要、第50集、pp.125-135（2012.3）